



## ふたば学舎外観

昭和4年築RC造3階建ての旧校舎建築の大部分を保存・活用。  
阪神・淡路大震災の復興市街地開発事業地区（新長田駅南側地区）と、  
火災を免れた市街地のほぼ境界に位置する（提供：ふたば学舎）。

## ふたば学舎

The Former Kobe Municipal  
Futaba Elementary School

戦災・震災を乗り越えながら、  
その後、児童数減少により閉校した  
旧二葉小学校（神戸市長田区）。  
1929（昭和4）年築の校舎建築を再整備し、  
地域活性化拠点として再スタートしたのが  
「ふたば学舎」だ。  
震災学習をはじめとする  
情報発信に積極的に取り組み、  
地域との強い結びつきを維持しながら  
活動を広げることで、  
市民の交流や地域の人材育成に  
欠かせない場所として存在しつづけている。

ふたば学舎 HP <https://futabasyo.jp/>

諫山一彦 | Kazuhiko Isayama

特定非営利法人ふたば専務理事、神戸市立ふたば学舎副学舎長 / 1953年生まれ。1979年神戸市役所入庁。主に職員採用、教職員採用、広報、企画。(財)阪神淡路大震災記念協会、企業誘致等を歴任。退職後、神戸市立まちづくり会館館長を経て、現職

聞き手

前田昌弘 | Masahiro Maeda  
京都大学 / 会誌編集委員会委員

佃悠 | Haruka Tsukuda  
東北大学 / 会誌編集委員会委員

費川雪=文

### 「ふたば学舎」設立の経緯

—今日は「ふたば学舎」の運営に携わられている諫山一彦さんにお話をうかがいます。歴史ある小学校閉校後の跡地利用ということから、この場所に対する地域の方々のご尽力や思い入れには並々ならぬものがあつたと拝察します。「ふたば学舎」の設立にはどのような議論や取り組みがあつたのでしょうか。経緯について教えてください。(前田)

諫山 そもそもここは、1929（昭和4）年に神戸市二葉尋常小学校として開校しました。その後、神戸市二葉国民学校と改称し（1941、昭和16年）、第二次世界大戦の戦火に耐えたのち、1945（昭和20）年に神戸市立二葉小学校と改称し、地域の小学校としてたくさんの児童の学びの場となりました。1995（平成7）年にこの地を襲った阪神・淡路大震災では、校内に避難所が開設されました。このように、二葉小は戦災と震災をくぐり抜けた歴史をもつ学校でしたが、周辺地域の少子化の影響を受け、2006（平成18）年に惜しまれながら閉校しました。

閉校後、校舎は解体・撤去が予定されていましたが、地元をはじめこの地域を包括する長田区連合婦人会から、旧二葉小の建物を地域の交流の場として活用していきたい、という強い要望が出されました。この要望を受け、矢田立郎市長（当時）は、校舎を残す意向を示します。そこから、旧二葉小校舎の活用に向けた検討委員会が立ち上げられ、ワークショップなどを幾度も開催して、地域の方々とともにこの場所の新たなあり方を模索しました。地元の人にとって、とても愛着のある小学校でしたから、非常に活発な議論が展開されましたね。そして、指定管理者としてNPOふたばが設立され、2010（平成22）年11月に「神戸市立地域人材支援センター」として再出発を遂げました。

最初はこのように「地域人材支援センター」という名前だったのですが、ややわかりづらかったことと、何より



震災当日の二葉小  
二葉小周辺は阪神・淡路大震災でも被害が特に甚大だったエリアであり、燃え広がる火災から逃れた多くの住民が小学校の校舎やグラウンドに避難した（提供：ふたば学舎）。

も、ここは長年地元「ふたば」という愛称で浸透していました。そのため、2016（平成28）年に、現在の「ふたば学舎」という名前に変更されました。

— ふたば学舎が取り組まれている活動の概要を教えてください。（前田）

諫山 開所当初から力を入れてきたのは、旧二葉小の避難所の経験を生かした、震災学習の機会の提供です。他にも、音楽室や調理室など、元小学校という場所性を生かした貸室事業や、工作や料理などの市民向け講座の開催、「まちの文化祭」「ぼっふカルチャーフェスティバル」といった市民主体のイベントの拠点になるなど、さまざまなかたちで地域の交流に関わっています。またこの建物や地域が気に入ったと作家の椎名誠さんや太田治子さんも講演してくれました。

近年の新たな事業としては、「ふたば縁塾」や「まち道部」「ふたばおやし塾」という、地域活用の人材育成を目的としたプログラムを開始したり、また地域の定住外国人や地縁組織の課題解決のために「ふたば国際プラザ」「地域コミュニティ相談センター」が開設されています。

### 震災の経験を生かした体験学習

— 今お話があったように、震災学習は被災を経験したふたば学舎ならではのプログラムだと思います。避難所だった当時の状況をお聞かせください。たとえば、被災後、どれくらいの避難者がこの場所を利用したのでしょうか。（佃）

諫山 詳細な数字はわかりませんが、最大で2,000人が避難所として利用した日もあったと聞いています。当然、3階にある講堂だけでは収まりきらず、震災直後の数日は、教室も避難所として使用していました。1月17日に被災し、

1カ月後の2月17日には授業が再開されましたが、最終的に避難所を閉鎖したのは9月3日ということなので、そこまで半年以上もの時間がかかったことになります。

— 震災学習は、具体的にどのような内容でしょうか。また、それらの運営方法や利用者についても教えてください。（前田）

諫山 市内で震災体験学習ができる施設は他にもありますが、段ボールで自分の避難所を作ってみる「避難所体験」という演習は、ふたば学舎らしいプログラムだし、好評をいただいていますね。時代も変化し、避難所の居住環境対策も進化しているので、もはや当時のように段ボールで避難所を作るようなことはないかもしれません。しかし自分で実際に作ってみて、そこで自分が最低1週間暮らすことができるかを考えてもらうという体験からは、想像以上に大きな気づきが得られると思います。他にも、紙食器づくりや炊き出し体験などがあります。いずれも、被災後の避難所生活の大変さを、実際にそれが起こった場所で体験するわけですから、リアリティをより強く感じられるのではないのでしょうか。

利用については、全国各地からの修学旅行内の訪問先として、あるいは、神戸市内の学校の課外授業としてお越しいただくことが多いですね。プログラムの内容は、その都度、学習目的をヒアリングし、目的に沿ったものを提案し、相談しながら柔軟に決定していきます。コロナ禍では状況がまた異なりますが、通常であれば、5月、



震災体験学習  
震災当時、地域の避難所となった3階の講堂で、段ボールの間仕切りを用いて避難所生活を体験する。修学旅行などで、全国からも多くの生徒がこの場所を訪れる（提供：ふたば学舎）。

10月の修学旅行シーズンには、多くの申し込みをいただきます。また、やはり1月17日前後は、地元の学校からのご依頼が増えますね。

他にも、近隣住民が語り部を務め、被災体験談を聞ける講座や、被災地のまち歩きといったプログラムも用意しています。実際に旧二葉小を避難所として利用され、震災を乗り越えられた方々が近隣にお住まいなので、協力をお願いすることがよくあります。

震災から27年経ちますが、やはりどう語り継いでいくのかは、大きな課題です。ふたば学舎は、現在地域人材育成に力を入れています。それは震災の語り継ぎに対しても同様です。たとえば昨年だと、震災当時に旧二葉小で1年生を担当していた教員の方の協力を得て、卒業生を数名探し出し、講座に語り部として参加してもらいました。その頃1年生だったということは、現在は30代半ばです。おぼろげながらに覚えている記憶を思い出しながら、一所懸命にお話をしてくれていました。さらにそのなかの一人は、東日本大震災でも被災したそうで、とても貴重な体験談を聞かせてくれました。容易でないことも多々ありますが、次の世代の語り部の育成にも、このように継続して取り組んでいます。

## 震災以後の活動の変化

— ふたば学舎がある新長田駅南側は、震災復興で地域の姿が特に大きく変化した地域です。ふたば学舎の存在の意義や担う活動内容も徐々に変化しているようですね。たとえば、現在は地域の人材育成にも力を入られているし、地域外からの来場者へのアピールも熱心にされていると思います。インターネットで知りましたが、意外なことに、ふたば学舎や近隣の商店街、神社は、新たなコスプレイベントの聖地にもなっているそうですね。(前田)

諫山 この地域と漫画やアニメとの関係は、実は今に始まったことではありません。震災後すぐに、今後どんなコンテンツでこの地の復興を進めていくのが議論され、アニメがひとつのキーワードとなったんです。『鉄人28号』や『三国志』などの作品で知られる漫画家の横山光輝さんが長田区のお隣の須磨区出身でゆかりがあったため、以前から街なかには漫画にちなんだモニュメントが数多く設置されていました。

同時に、時代の変化に対応するかたちで、コスプレを楽しめる、「コスメル」というイベントを開催しています。二葉小のレトロな教室や近くの駒林神社は、彼らにとって魅力的なフォトスポットのようです。地元商店街で使える金券を付した参加費をいただくことで、ただ写真を撮るだ



ふたば学舎内観  
南北に長い中廊下に沿って教室が並ぶ。事務所やテナント、市民活動のための貸室として利用されており、一部の教室は小学校当時の姿のまま残されている(提供:ふたば学舎)。

けではなく、地域のお店にも足を運んでもらえるように工夫もしています。この取り組みには、最初はやや否定的な地域住民も多かったようですが、今ではたくさんの若者がこの地域を訪れてくれていますし、復興の一つの分野として役に立っていると思います。

他にも、「ふたば国際プラザ」が開設され、地域の定住外国人の暮らしのサポートにも注力しています。私たちの地域に限らず、今後の地域社会にとって、この問題は大切です。元からの住民に、新しくここに移住してきた世代、外国から来た方々が入り混じり、交流が円滑になるような取り組みをしていきます。そこでも、ふたば学舎が地域に元々愛された学校だったことが、良い効果を発揮していくのではないのでしょうか。実際に、母校に行くような感覚があるのか、安心感や親しみやすさがあると言われていています。

— 時代は流れ、環境はどんどん移り変わっていても、そのなかで変わらず地域のよりどころになっているんですね。震災と震災を超えてなお、この場所が残っていることには、あらためて大きな意義があると思いました。それは地域の皆さんのためまぬ努力や強い思い入れ、そして変化を受け入れるしなやかな姿勢によって継承されているのだと、知ることができました。(佃)

2021年12月24日、ふたば学舎にて